

ひろしま絵日記

著者：中島 晶子 絵：ささめや ゆき

夏休み、ひいおばあちゃんの家で古いノートを見つけたみなみちゃん。それは、ひいおばあちゃんの妹、まさこちゃんの日記でした。日々の小さな喜びや我慢が書かれている日記に、親近感を抱くみなみちゃん。

しかし、8月5日の日記の先はすべて白紙でした。

翌朝、学校へ行ったきり戻らなかったまさこちゃん。

ひいおばあちゃんは、原爆が残した深い悲しみを、みなみちゃんにやさしく語り聞かせるのでした。



[出版社：小峰書店]

1945年8月6日 あさ8時15分、わたしは

言葉：原爆を体験したこどもたち イラスト：いわさき ちひろ

今朝の8時15分、あなたは何をしていましたか？

1945年8月6日の同じ時間、広島の子どもたちの日常は、原爆によって一瞬で奪われてしまいました。

絵本作家のいわさきちひろさんは、「もし自分がその場所にいたら」と子どもたちに寄り添い、「世界中の子どもたちが、幸せに暮らせますように」と願いを込めてこの本を描きました。

「あたり前の朝」を思い浮かべながら、この願いと一緒に考えてみませんか。



[出版社：童心社]

ダニーさんのちゃぶだい

企画：ダニー・ネフセタイ 作：なるかわ しんご

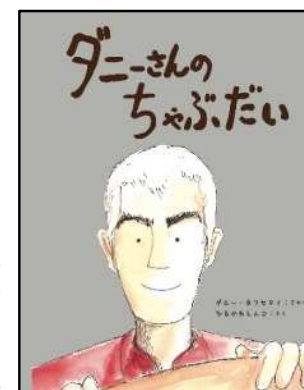
イスラエル出身のダニーさん。夢は戦闘機のパイロットになることでした。

周りの国の敵を倒さなければいけないと教えられてきました。しかし兵隊をやめて日本に来たダニーさんは、今まで敵と思っていた人達と友達になります。

敵なんてどこにもいない、みんな同じ人間なんだと気付いたダニーさんは、今、日本で家具職人として、丸いちゃぶだいを作っています。

ダニーさんのちゃぶだいへの思いを感じてください。

[出版社：イマジネーション・プラス]



一郎君の写真 日章旗の持ち主をさがして

著者：木原 育子 絵：沢野 ひとし

新聞記者のもとに「寄せ書きされた日章旗の持ち主を探してほしい」との依頼が届きます。

「一郎君へ」と書かれた旗には59人の名がありました。

わずかな情報を頼りに、記者は一郎君の素顔や、送り出した人々の思いに触れていきます。

80年前を懸命に生きた若者の姿と、日章旗が今に伝える戦争の真実を通し、平和の尊さを私たちに語りかけるお話です。

[出版社：福音館書店]



ひとのなみだ

著者：内田 麟太郎 絵：nakaban

戦場に行くのはロボットで、自分たちは安全な場所にいる。

ニュースから流れるのは、まるでゲームのような勝利の数字だけ。

もし私たちが、他人の痛みにも何も感じなくなってしまうたら、ロボットと何が違うのでしょうか。

現実から目をそむけない大切さを描く絵本大賞受賞作品。

ロボットには流せない、ひとのなみだの意味を深く考えさせられます。

私たちは人だから泣く、ロボットではない。

[出版社：童心社]



川滝少年のスケッチブック

著者：小手鞠 るい 絵：川瀧 喜正

著者のもとに届いた2冊のスケッチブック。

そこには、父「川滝少年」が過ごした戦時中の日常が描かれていました。

大変な時代を生き抜いた記憶が、ユーモアのあるタッチで描かれ、ページをめくるたびに当時の暮らしが伝わってきます。

歴史的にも非常に貴重なこの記録。

平和はあっという間に壊れてしまうからこそ、父の体験を未来へ語り継いでいきたいという、著者の切なる願いが込められた一冊です。

[出版社：講談社]

